

彼岸過ぎまで次々と咲く木槿の花

小関 栄

「道のべの木槿は馬に喰わせけり」は芭蕉の野ざらし紀行にある俳句。木槿はこの界限至る所があり、初夏から花が咲き始め、秋の彼岸過ぎまで長い間咲き続けている。花は一重、八重あり、色も淡紫、薄紅、白と多彩、大輪だが朝咲いた花は夜には凋む一日花。沢山のつぼみが次々と開いて見事だ。また、開花は一日限りだから「槿花一朝の夢」という故事もある。

この花は世界的に分布、欧米では Sharon Rose、Syrian Hibiscus などと呼ばれているが、最も多いのは中国、インド、韓国、日本で、国により花に対する感じ方が様々なのは面白い。

中国では木槿、木錦とって、一日限りで散ってしまう花の様子から、はかないもの、移りやすいものとして余り貴重には扱われていないが、韓国では次々と花を付ける様子を無窮花と呼んで粘り強いものの象徴という感じで愛されている。しかもこの花の咲く地は槿域と云い、かつては朝鮮の代名詞、今この花は大韓民国の国花に指定されている。

日本では平安の昔から、アサガオ(朝貌)とかハチス(蓮)と呼び名があり、花色が種々あって親しまれている。殊に白色は遠州木槿と呼び、初秋の茶花としては欠かせないもの、また花の付け根に紅をさした底紅の花(むくげの花のこと)はデリケートな美のイメージがあり珍重されている。花言葉は「柔和」である(写真は生け垣に咲く底紅の花 9/22 彼岸の日に撮影)



緑陰に 底紅の花 風そよぐ 淡水

知っていますか？

秋の七草

前田 由美子

春の七草はよく知られていますが 秋にも七草があります。ご存知でしょうか？春の七草と違って、秋の七草を摘んで食べたりするのではなく特に何の行事もなく花野を散策して短歌、俳句を楽しんで詠むことが古くから行はれていたそうです。(注)花野～秋の野の花が咲き乱れる野原

秋の七草 **女郎花(おみなえし)** **尾花(おばな=薄)** **桔梗(ききょう)**
撫子(なでしこ) **藤袴(ふじばかま)** **葛(くず)** **萩(はぎ)**

万葉集の第8巻に秋の花を詠んだ(七種の花)二首(1537番 1538番)があります。

秋の野に さきたる花を 指折り(およびをり)

かき数ふれば 七種(ななくさ)の花

山上憶良